

高校生とJAが共同開発 「かしてつバス弁当」誕生



開発に当たった生徒たちとJAの島田さん、木内さんは生徒たちの書きのメッセージカードが添えられる

県立石岡商業高校(石岡市、原田令子校長)3年生のグループがこのほど、市内のJAひたち野(金井一夫組合長)と共同開発した「かしてつバス弁当」を商品化した。同グループは課題研究で商品開発を専攻していた13人で、同校が廃線となった鹿島鉄道の軌道跡を走る「かしてつバス」の存続、利用促進活動を図る応援団の中心校であることから、オリジナル弁当を企画販売して広くアピールしたいと今春から取り組んでいた。弁当は2種類あり、8、9日に水戸市内で開かれた「いばらきものづくり教育フェア」で先行販売され、同JAで16、17日に開かれる収穫祭から店頭販売される。

商品開発グループでは、コンセプトを「お母さんが作った感じ」「健康を考えた」の2つに絞り、地元の農産物などの食材を生かした弁当を考えてきた。パッケージのデザインも、かしてつバス応援団のキャラクターをメインに、全員で描いたイラストの中から親しみやすいイメージのものを選んであしらうなど、生徒らのアイデアが盛り込まれている。

「お母さん」の弁当は、コロッケや空揚げ、ポテトサラダなど家庭的なもので、「健康」は豆腐ハンバーグをメインに雑穀米、ゆで卵、野菜の煮物などが入っている。限定300個ぐらいいの予定だ。

弁当の売価は500円と決めていた。生徒たちに考えるだけでなく、形にするまでを体験させたかったという担当の松原

真司教諭は、「JAや市など関係各所に随分無理をお願いしてしまった」と恐縮する。

原価計算から食材調達、調理を担当した同JA農産物直売所「大地のめぐみ」の島田大久店長と木内恵美さんは、期待に込めようとした様々な工夫を凝らした。

厳しい条件だったと笑う島田店長は、「外部はもちろん、高校生とのコラボは初めてだが、良い試み。地元同士これからも協力していきたい」。木内さんも「生産者も生徒たちの企画だからと協力してくれただお陰。直売所の定番弁当になれば」と期待を寄せる。

商品化に先駆けて直売所で試食品完成披露会が開かれた。生徒らは開発段階で自分たちが試作した弁当と比べ、「さすがプロ」と感嘆。今回の研究で考えるだけで



お母さんの手作り弁当(左)と健康(ヘルシー)弁当。パッケージにはバスらしくタイヤも(写真上)

なく、販売許可を取ったりするなど必要な手続きや社会の仕組みが分かっていたという。

グループ代表の飯村成美さんは、「イメージよりずっときれいに作ってもらい、うれしい。たくさんの人に食べてもらえると嬉しい」とうれしそうに話した。